



## 100年の時を超えて

2年主任 永岡 健二郎

今年の2月6日 午前4時17分 トルコシリアにおいて未曾有の大地震が起きました。現在50,000人以上の犠牲と甚大な被害が報告されています。そんなトルコと日本の絆。広く知られていませんが、ここに紹介します。

みなさんが生まれる前の話。

イランイラク戦争が激しさを増す中の1985年3月イラクの大統領が「今から48時間後に、イランの上空を飛ぶ飛行機を無差別に攻撃する」という声明を発表しました。イラン在住日本人は、慌てて首都テヘランの空港に向かい出国を試みましたが、どの飛行機も満席で搭乗することができませんでした。

世界各国は自国民を救出するために救援機を出しましたが、日本からの救援機の派遣は、航行の安全が確保できないとの理由から見送られ、空港にいた日本人は途方に暮れていました。

イラクが示した期限が迫ろうとしたその時、1機のトルコ航空の飛行機がテヘラン空港に着陸し、空港に取り残された200名を超える日本人を乗せ、成田空港に向かいました。

トルコ航空が日本人を救出した理由は、

「我々は、まだ恩返しをしていない」

でした。

彼らの言う「恩返し」とは…？

さらに遡ること約100年。19世紀末のエルトゥールル号遭難事件。オスマン帝国（現在のトルコを含む地域）の軍艦、エルトゥールル号は、1889年、航海訓練を兼ねて数百名の派遣団を乗せ日本に向かいました。

明治天皇に謁見した後、一行は帰路に就こうとしますが、出航を台風の季節が過ぎた後に延ばすように説得する大日本帝国側に対して、オスマン帝国海軍の弱体化を晒したくないと横浜港から帰国を決定したのです。

しかし、1890（明治23）年9月16日21時頃、台風による強風にあおられたエルトゥールル号は和歌山県串本町の沖合で岩礁に激突、大破してしまいます。何とか脱出した乗組員の一人が、近くの集落へ助けを求めました。この遭難に際し、当時の大島島民（現在の串本町、紀伊大島）は不眠不休で生存者の救助、介護、また殉難者の遺体捜索、引き上げにあたり、日本全国からも多くの義金、物資が遭難将士のために寄せられました。

587名が殉職、生存者わずかに69名という大海難事故となりましたが、69名の生存者は神戸で治療を受けた後、同年10月5日、比叡、金剛の2隻の日本海軍の軍艦により帰国の途につき、翌1891（明治24）年1月2日、無事イスタンブールに入港、トルコ国民の心からの感謝に迎えられました。

以降、トルコ国民は日本に対し親愛と感謝の念を根付かせるきっかけとなりました。

先のテヘラン空港救出作戦の他、東日本大震災においてもトルコ政府やトルコ国民から多大な支援を受けました。

当時の名もなき大島島民の献身的な救助、官民挙げての支援がめぐりめぐって100年以上経った現在でも、日本とトルコの人々の絆として残り続けているのです。

ひとりひとりの力はわずかですが、それらを重ね合わせ、時を超え、紡いでいく先に希望の世界があるように思えます。

## 第3回 球技大会開催



3月15日（水）に3学期球技大会が開催されました。体育館ではバレーボール、運動場ではサッカーの試合が行われ、クラスで取り組む最後の行事を楽しみました。



総合優勝

1組、6組

